

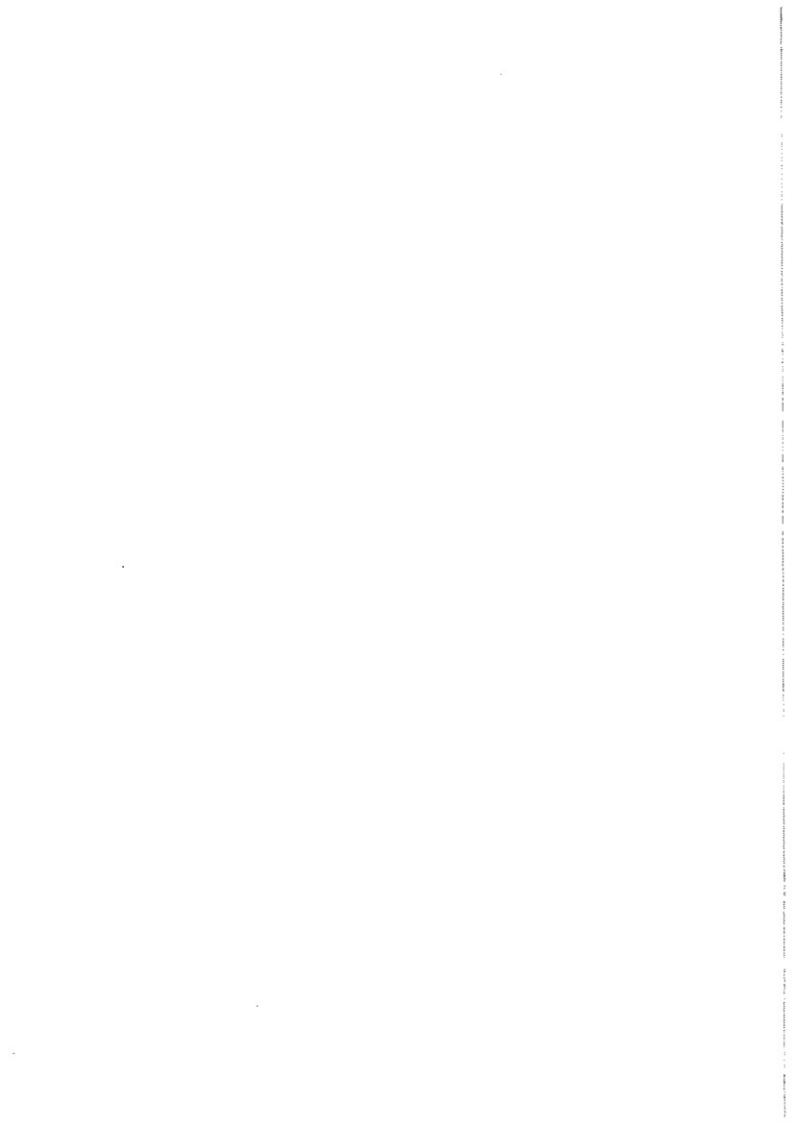
# 宇土城跡（西岡台） V

—発掘調査・保存整備事業概報—

宇土市埋蔵文化財調査報告書 第23集

2002年3月

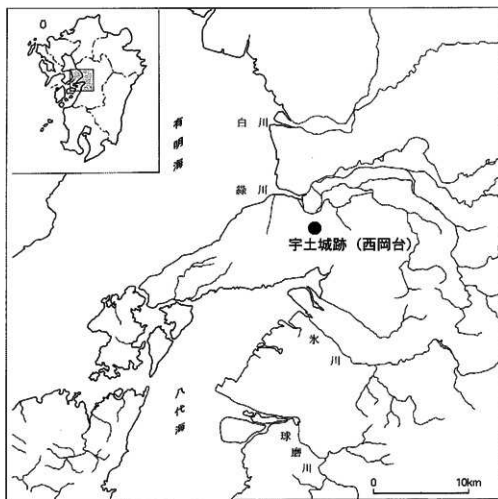
熊本県宇土市教育委員会



# 宇土城跡（西岡台）Ⅴ

—発掘調査・保存整備事業概報—

宇土市埋蔵文化財調査報告書 第23集



2002年3月

熊本県宇土市教育委員会



## 序 文

本書は、宇土市教育委員会が実施した宇土城跡（西岡台）の発掘調査と保存整備工事の概要報告書です。

平成2年度に保存整備のための発掘調査を開始して以来、1次調査で確認された空堀跡の延長部分や多数の掘立柱建物跡のほか、柵列跡・門跡・道跡などを確認しました。これらの遺構から出土した土師器・瓦質土器や貿易陶磁器などから、宇土城跡における当時の生活の様子を窺い知ることができます。また、空堀跡が未完成であったことや、石塔を用いた城破り跡を確認するなど、今後の中世城郭研究に影響を与える重要な成果が得られています。

保存整備に関しては、発掘調査の成果や当時の歴史的背景にもとづいた整備を行うため、有識者で構成される史跡宇土城跡保存整備検討委員会を年3回程度開催しています。本委員会の指導・助言をうけて、平成12年度までに主郭（千畳敷）の掘立柱建物跡の平面・立体表示や、空堀跡復元工などの整備工事を行いました。

最後になりましたが、調査ならびに整備にあたってご指導・ご協力いただきました文化庁ならびに熊本県教育委員会、保存整備検討委員の先生方をはじめ、関係各位の皆様にご心から感謝申し上げます。

平成14年3月

宇土市教育委員会

教育長 坂 本 光 隆

## 例 言

1. 本書は国・県補助金を得て宇土市教育委員会が実施した、主郭（千畳敷）の発掘調査（14次）ならびに保存整備工事（平成11・12年度）の概要報告書である。
2. 調査地は熊本県宇土市神馬町字千畳敷579・615-1に所在する。
3. 発掘調査は藤本貴仁が担当した。
4. 遺構実測図作成は野村健一郎・山口陽子・平木君代・藤本が行ない、一部を（株）埋蔵文化財サポートシステム・（有）スカイサーベイ九州に委託した。
5. 遺構・遺物写真撮影は藤本が行ない、空中写真撮影は（有）スカイサーベイ九州に委託した。
6. 遺構実測図の製図は瀧上幸恵・野村・藤本が行なった。
7. 本書で用いたレベルは海抜絶対高であり、方位は座標北（座標第Ⅱ系）である。
8. 本書の執筆・編集は藤本が行った。
9. 出土遺物・その他関連記録は、宇土市教育委員会（宇土市新小路町95）に収蔵・保管している。

## 本文目次

<b>第Ⅰ章 発掘調査</b> .....	1
<b>第1節 はじめに</b> .....	1
1 調査にいたる経緯と経過.....	1
2 調査の組織.....	1
<b>第2節 位置と環境</b> .....	3
1 遺跡の位置と地理的環境.....	3
2 歴史的概要.....	4
<b>第3節 調査の成果</b> .....	9
1 調査の概要.....	9
2 遺 構.....	9
3 遺 物.....	16
<b>第4節 まとめ</b> .....	18
<b>第Ⅱ章 保存整備工事</b> .....	21
<b>第1節 はじめに</b> .....	21
<b>第2節 平成11年度保存整備工事</b> .....	22
<b>第3節 平成12年度保存整備工事</b> .....	27

## 挿図目次

第1図 宇土城跡（西岡台）と周辺の中・近世城跡 (s = 1/100,000).....	3
第2図 宇土城跡縄張り図 (s = 1/2,500).....	5-6
第3図 調査区遺構配置図 (s = 1/200).....	10
第4図 SD01土層断面図 (s = 1/50).....	11
第5図 SD02実測図 (s = 1/60).....	13-14
第6図 SD19実測図 (s = 1/100).....	15
第7図 造成平面図及び植栽平面図 (s = 1/500).....	23-24
第8図 各表示施設 (s = 1/20・40・80・200).....	25-26
第9図 19号建物跡位置図 (s = 1/2,000).....	27
第10図 骨組断面及び調縁組詳細図 (s = 1/150).....	28
第11図 断面詳細図1 (s = 1/80).....	29
第12図 断面詳細図2 (s = 1/9・30).....	30

## 写真目次

写真1	調査区空中写真（南より）	9	写真17	青磁	17
写真2	調査前状況（南より）	11	写真18	白磁	17
写真3	SD01検出状況（北より）	11	写真19	染付	17
写真4	SD01土層断面（東より）	11	写真20	二彩	17
写真5	SD02検出状況（北より）	11	写真21	色釉器物	17
写真6	SD02発掘状況（南より）	11	写真22	赤絵	17
写真7	SD02石塔出土状況（南より）	11	写真23	石塔（下層）を覆う土砂（7次調査北より）	18
写真8	SD02上層出土の石塔（西より）	12	写真24	16・17・19号建物跡重畳状況（南西より）	21
写真9	SD02下層出土の石塔（東より）	12	写真25	柱跡表示基礎掘付（17号建物）	22
写真10	SD02土層断面（南より）	12	写真26	洗い出し舗装路盤完了状況（16号建物）	22
写真11	SD04発掘状況（西より）	12	写真27	16号建物整備状況（南より）	22
写真12	SD04土層断面（東より）	12	写真28	17号建物整備状況（東より）	22
写真13	SD19空中写真（東より）	16	写真29	基礎コンクリート打設	27
写真14	SD19石塔出土状況	16	写真30	木造組建	27
写真15	土師器	17	写真31	外壁工事（下地塗り）	27
写真16	瓦質土器	17	写真32	竣工（南より）	27

# 第I章 発掘調査

## 第1節 はじめに

### 1 調査にいたる経緯と経過

昭和49年(1974)、当時市指定史跡だった宇土城跡(西岡台)<sup>1)</sup>が位置する台地に、市立鶴城中学校の校舎移転が決定した。ただちに記録保存を前提とした発掘調査が実施され、古墳時代前期の首長居館を囲むV字溝、中世後期の宇土城跡の主郭(千疊敷)をめぐる空堀跡や溝跡、掘立柱建物跡などの遺構と、多量の遺物が出土した。この結果を受けて中学校移転は中止となり、宇土城跡を史跡公園として保存・活用することになった。

昭和54年(1979)3月12日、宇土城跡は国の史跡に指定され、昭和56年度には保存整備の基本方針をまとめた『史跡宇土城跡環境整備計画』が策定された。宇土城跡を第1～5ブロックに地区割し、各ブロックごとに遺構表示施設や休憩施設が計画された。第1ブロックは平成元年度におおむね整備を完了しており、現在整備中の第2ブロック(千疊敷および周辺地区)の整備は平成元年度より着手している。この間、宇土城跡が位置する台地の基盤層は宇土半島の主峰である大岳の火山噴出物である旧期輝石安山であり、脆く崩壊しやすいことや、大雨による地滑り災害などのため城郭遺構の整備に直接関係しない防災工事に数カ年を要した。

史跡整備を目的として第2ブロックの発掘調査が開始されたのは、平成2年(1989)の第4次発掘調査からである。現在までほぼ毎年調査が行われており、千疊敷において多数の掘立柱建物跡が検出されたほか、道跡、門跡などが新たに確認された。その他、千疊敷を囲む空堀が未完成であることや、虎口周辺部で石塔を用いた城破り跡を確認するなど注目すべき成果が得られている。

保存整備に関しては、平成9年度に学識経験者で構成される史跡宇土城跡保存整備検討委員会が発足し、宇土城跡の調査成果や歴史背景、歴史公園としての位置付けを考慮した整備が進められている。本委員会の指導・助言のもとに、平成10年度には『史跡宇土城跡保存整備基本計画書』が刊行され、平成16年度をめどに第2ブロックの発掘調査と整備を進めている。

本書はこれまでの調査成果や整備事業のうち、平成13年度に行った第14次発掘調査と平成11・12年度保存整備工事の概要をまとめたものである。

### 2 調査の組織(敬称略、平成13年度)

調査主体 宇土市教育委員会

調査担当 藤本貴仁(文化振興課技師)

調査事務局 吉永栄治(文化振興課長)、高木恭二(同課長補佐)、松田安代(同参事)、一安隆正(同主事)

史跡宇土城跡保存整備検討委員会

北野隆(委員長、熊本大学)、服部英雄(九州大学)、千田嘉博(国立歴史民俗博物館)、高野茂(熊本県立宇土高等学校)



#### 調査指導・助言及び協力者

本中誠・加藤允彦（文化庁記念物課）、大田幸博（熊本県文化課）、鶴島俊彦（熊本県人吉市教育委員会）、上田耕（ミュージアム知覧―鹿児島県知覧町立歴史民俗博物館）、宮武正登・高瀬哲郎（佐賀県立名護屋城博物館）、柴田龍司（千葉県文化財センター）、村田房夫（平成13年12月退任）・鶴田倉造・舟田義輔（故人）・濱口俊夫・吉田恒・佐藤伸二（宇土市文化財保護審議会）

#### 調査および整理作業員

本田亘、村山初夫、前田昭三、野添重友、本田栄子、村山艶子、前田房子、橋本チエ子、小畑律子、古山節子、福田フミエ、園田佳代子、浅川レイ子、山田敏江、山形ユキコ、釜賀ヨウ子、白石節子、稲葉マシ子、野村健一郎、平木君代、山口陽子、淵上幸恵

#### 註

- 1) 西岡台から東へ300mには小西行長が築城した近世城郭の宇土城跡（城山）が存在するため、以下では、特にことわりがない限り、「宇土城跡」とは「宇土城跡（西岡台）」を指す。

## 第2節 位置と環境

### 1 遺跡の位置と地理的環境

熊本県宇土市は、熊本県の中央海岸部より西側に突出した宇土半島基部北側に位置し、東西約24.8km、南北約7.6kmと東西に長く、面積は約74.17km<sup>2</sup>である。北に熊本市・下益城郡富合町、南に同松橋町・宇土郡不知火町・同三角町、東に下益城郡城南町とそれぞれ接している。

宇土半島北側は有明海、同南側は不知火海（八代海）に面しており、平野が比較的少ない山がちな地形で、主峰は大岳（478m）である。市域境の宇土半島基部北側には、県内主要河川のひとつである緑川が貫流し、その流れによって形成された沖積地に宇土市街地が所在する。北に熊本平野、南に八代平野をのぞみ、古代から現在にいたるまで交通の要衝である。

宇土城跡は、本沖積地の西側縁辺部の通称「西岡台」と呼ばれる標高約39m、東西約750m、南北約400mの独立丘陵に位置する中世城郭である（第1図）。丘陵北側は中央の谷部を除き急傾斜地で要害をなすが、南側は緩傾斜地で現在は住宅地や畑地として利用されている。

城跡の規模は厳密には明らかにし難いが、現況の地形や発掘調査の所見から本丘陵の多くを占めると推定される。宇土城跡の曲輪は、間に鞍部を挟んで東西に位置する



宇土城跡内跡5万分の1地形図（承認番号：平6大原第072）を転用

- 1 田平城跡
- 2 雄岳城跡
- 3 大岳城跡（伝承）
- 4 白山
- 5 宇土城跡（西岡台）
- 6 城ノ越（陣跡）
- 7 宇土城跡（城山）
- 8 石ノ瀬城跡
- 9 高城跡
- 10 木原城跡
- 11 隈庄城跡
- 12 阿高城跡
- 13 豊福城跡
- 14 竹崎城跡
- 15 花園山城跡

第1図 宇土城跡（西岡台）と周辺の中・近世城跡（S=1/100,000）

2つの高位部に所在する。

東側が「千疊敷」と呼称される主郭であり、標高約37m、東西約50m、南北約65mである(第2図)。調査によって多数の掘立柱建物跡や欄柵跡・門跡・道跡が確認され、周囲には2重の空堀跡(外堀は東側と南側のみ)や腰曲輪、切岸を連続して配置する。西側が「三城」と呼称されるⅡ郭であり、標高約39m、東西約80m、南北約35mで、1次調査で掘立柱建物跡や門跡などが確認されている。三城の西側約50mには地元で「カラホリ」と呼ばれる長さ310m、幅10～15m、深さ5～7mの堀切りと土塁が存在するが、宇土城西側城域はこれらを境とするものと推定される。過去の調査で堀底に側溝を有することや、堀切南端で礎石跡(門跡?)が検出されていることから、平時には堀底道として利用されたとみられる。

丘陵南側は、比較的幅広い削平地が連続する地形をなし、伝承で大手とされる地点も所在する。南麓付近には、近世初頭に戦国大名小西行長の家臣団が居宅したとされる馬場集落があり、弥生から中世の遺跡である陣の前遺跡も存在することから、中世も領主居館や家臣団の屋敷がこの地に存在した可能性が高い。城跡と密接に関連する籠集落とみられる。

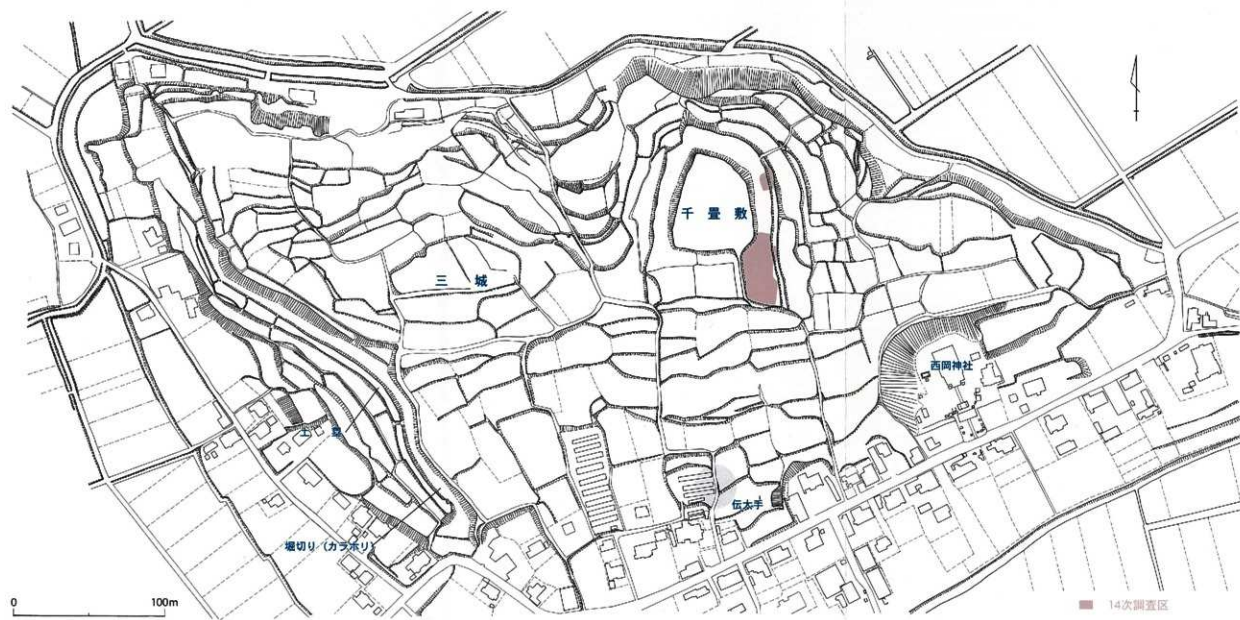
## 2 歴史的概要

宇土城跡周辺には、縄文時代から近世までかなりの数の遺跡が点在する。本書では紙面の都合によりこれら全てを取り上げず、宇土城に関連する中世から近世初頭の歴史的概要に限り論述する(第1図)。

南北朝期から16世紀初頭までの在地領主は、菊池氏一族と伝えられる宇土氏で、文献上での初見は宇土高俊である。正平3年(1348)に征西將軍懐良親王を宇土津(推定地:宇土市椿原町)に迎え入れており、南朝方として活動した。元中7年(1390)、宇土氏の居城は九州探題今川了俊率いる軍勢の攻撃を受けて落城しているが、この城がおそらく宇土城であろう。以後、宇土氏については引き続き本拠を維持したとみられるが、その系譜は宇土忠豊と養子の為光(菊池持朝の子)の代まで明らかではない。文亀3年(1503)、為光が守護職をねらって守護菊池能運と争い失敗、大見(不知火町)において殺害されたとみられている。

この頃、肥後南部では元弘の変の勲功として建武政権より八代庄を拝領し、南北朝期に伯耆国から八代に移住した名和氏と人吉・球磨地方の相良氏が八代支配をめぐり争いが絶えなかった。文亀4年(1504)、名和顯忠は居城の古鹿城(八代市)を菊池氏・相良氏によって追われ木原城(富合町)に一時移るが、その後すぐに宇土氏滅亡後の宇土城に入った。名和氏が宇土城主となった背景として、顯忠が為光の娘婿だったことや、宇土城に比較的近い木原城にいたことが関係するとみられる。以後、名和氏は木原城のほか出平城(宇土市)・阿高城(城南町)・豊福城(松橋町)・矢崎城(三角町)など陸上・海上交通の要衝に支城を配した。また、堀切りが残る白山頂上部は八代方面を一望できることから、砦としての機能を有したとみられる。名和氏が宇土を拠点としてからも、相良氏とは争いが絶えず、甲佐から宇土半島へと通じる街道と、八代から隈本へと通じる街道が交錯する位置にある豊福城をめぐる幾度となく争奪戦を繰り広げたことが『八代日記』に記されている。

天正15年(1587)、豊臣秀吉の九州平定によって名和顯季は開城した。顯季は筑前国内に領地入替となって肥後との所縁が切れ、江戸時代になると顯季の子孫は柳河立花藩士として存続した。現在、名和氏の菩提寺である曹洞宗宗福寺(宇土市椿原町)には、名和行直の墓や名和武顯・行興の位牌が残っている。



第2図 宇土城跡縄張り図 (S=1/2,500、昭和49年測量、調査前)

翌16年（1588）には、人吉・球磨を除く肥後南半を領した小西行長は初め、宇土城に入城したが、翌17年に新城となる宇土城跡（城山）の築城に着手した。行長は宇土城下の整備にも積極的に取り組んだとみられるが、西軍として参加した関ヶ原の戦いに敗れ処刑された。この頃、石垣原合戦で出立していた加藤清正は、豊後国玖珠郡より兵を引き返し、城ノ越（宇土市栗崎町）や、すでに廃城になっていたとみられる宇土城跡（西岡台）などに陣を張り城山を攻め落とした。その後、清正は自らの隠居所とするために城山を改修したが、慶長16年（1611）に亡くなった。

翌年の慶長17年（1612）と天草・島原の乱後の寛永14年（1637）、幕命により城山は破却された。特に寛永期の破却は徹底的に行われたらしく、現在、清正改修後の石垣が本丸南西側の一部で露出するほか、堀も大規模に埋め立てられたため、現況地形からかつて堀が存在したことが認識できる程度である。

### 参考・引用文献

- 平山修一・高木恭二ほか1977『宇土城跡（西岡台）』本文編、宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集、宇土市教育委員会  
木下洋介1981『宇土城跡（城山）』調査概観1、宇土市埋蔵文化財調査報告書第4集、宇土市教育委員会  
高木恭二・木下洋介1985『宇土城跡（城山）』、宇土市埋蔵文化財調査報告書第10集、宇土市教育委員会  
木下洋介・元松茂樹1988『宇土城跡（西岡台）』Ⅱ、宇土市埋蔵文化財調査報告書第18集、宇土市教育委員会  
藤本貴仁2000『宇土城跡（西岡台）』Ⅲ、宇土市埋蔵文化財調査報告書第21集、宇土市教育委員会  
宇土市教育委員会編2000『小西行長公没後400年記念事業資料集』宇土市・宇土市教育委員会  
藤本貴仁2001『宇土城跡（西岡台）』Ⅳ、宇土市埋蔵文化財調査報告書第22集、宇土市教育委員会



### 第3節 調査の成果

#### 1 調査の概要

14次調査は平成13年6月上旬から8月上旬、同9月下旬から平成14年1月中旬にかけて実施した。主たる調査区は千畳敷南東側の空堀が圍繞する腰曲輪で、本調査区北側約10mには虎口が所在する。調査面積は約950㎡である(第3図、写真1)。その他、第11次調査で検出した竪堀状遺構SD19の未掘部分(約130㎡)の調査を行った。

主に検出・調査した遺構は、空堀跡(SD02・SD04)・竪堀状遺構(SD19)などの中世期の城郭遺構の他、古墳時代前期のV字溝(SD01)である。調査区南側から東側の一部は暗茶褐色を呈する中世期の整地土であり、16世紀中頃の青磁細蓮弁文碗が出土しているためこの時期以降に整地が行われたとみられる。

出土遺物は土師器・瓦質土器・輸入陶磁器、石塔の残欠などの中世遺物が主体であり、その他に古墳時代の土師器片や近世以降の陶磁器片などが出土した。

#### 2 遺 構

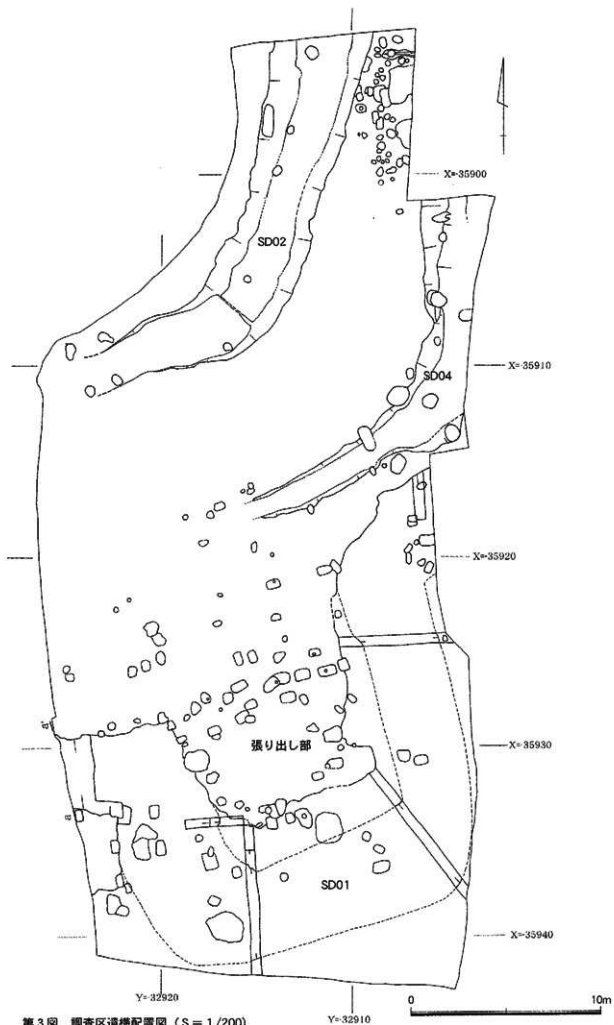
##### SD01(第3・4図、写真3・4)

古墳時代前期首長居館に伴うV字溝である。昭和49・50年度の1次調査で検出され、以後、6次・10次・12次調査でも部分的に確認されている。これらの調査所見から千畳敷段下の平場を全周すると推定されていたが(高木・武末2001)、今回の調査はこれを裏付ける結果となった。さらに、張り出し部を1ヶ所確認した。1次調査の平場面より約0.8m下がった場所で検出されたことや、そのほとんどが中世の整地土直下で検出されるなど、周辺の土地はかなり手が加えられているようである。



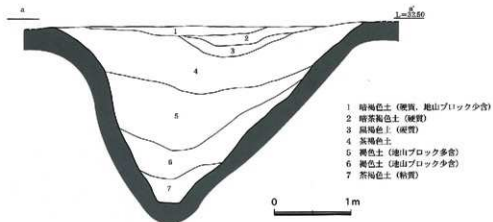
写真1 調査区空中写真(南より)

V字溝の規模は上幅3.8~5.3m、底幅0.3~0.5m、深さ約2.4mで、傾斜角度は内側が約47°、外側が約60°と外側がより急峻である。これは、溝の内側が生活空間として利用されたのに対し、外側は防御を重視したためと考えられる。埋土の中・下層は細かな分層が不可能で、上層は硬質の暗茶褐色土や黒褐色土の薄層が堆積している。高木・武末2001報告のH-1区E T土層断面における黒色土層(IV層)が上記の黒褐色土や暗茶褐色土とほぼ対応する層と考えられ、平安から鎌倉時代頃にはほぼ埋没したと推定される。



第3図 調査区遺構配置図 (S = 1/200)





第4図 SD01土層断面図 (S = 1/50)



写真2 調査前状況 (南より)



写真3 SD01検出状況 (北より)



写真4 SD01土層断面 (東より)



写真5 SD02検出状況 (北より)



写真6 SD02発掘状況 (南より)



写真7 SD02石塔出土状況 (南より)

また、張り出し部は千疊敷南西側で検出されたものとはほぼ同じ形態・大きさであり、対をなすものだろう。最大幅約10m、同長約8mである。望楼などの遺構は確認されなかった。

SD02 (第3・5図、写真5~10)

断面逆台形を呈する箱堀である。西側部分が消失しているが、これは後世の削平が主な原因とみられ、本来は千疊敷東側の土橋部分を除き全周したと推定される。今回検出した部分は最大幅5.1m、底幅1.8~2.8m、最深部1.1m、堀壁の傾斜角度は約35°~55°である。表土直下が遺構面であることや、遺構の周辺は重機で削平された痕跡があることから、上位部分は消失したとみられる。堀底の標高は31.3~32.4mで、堀底の小段部分からスロープ状に西側に傾斜して急激に堀が浅くなる部分を除くと、ほぼ水平である。その他、堀の内側壁面には長径1.5m、短径0.5m、深さ0.5mの狭長なピットが1ヶ所掘りこまれている。

また、調査区北端から南側の約15mの範囲内で、五輪塔や宝篋印塔などの凝灰岩製石塔の残欠が多数出土した。これらは上層と下層に分けられ、前者は堀の上位から中位部分にかけて、後者は堀底に近い下位部分からであり、上層の石塔のなかには堀に直交方向に並べられたかのような状態で検出されたものもある。下層の石塔は地山のブロックや砂粒



写真8 SD02上層出土の石塔 (西より)



写真9 SD02下層出土の石塔 (東より)



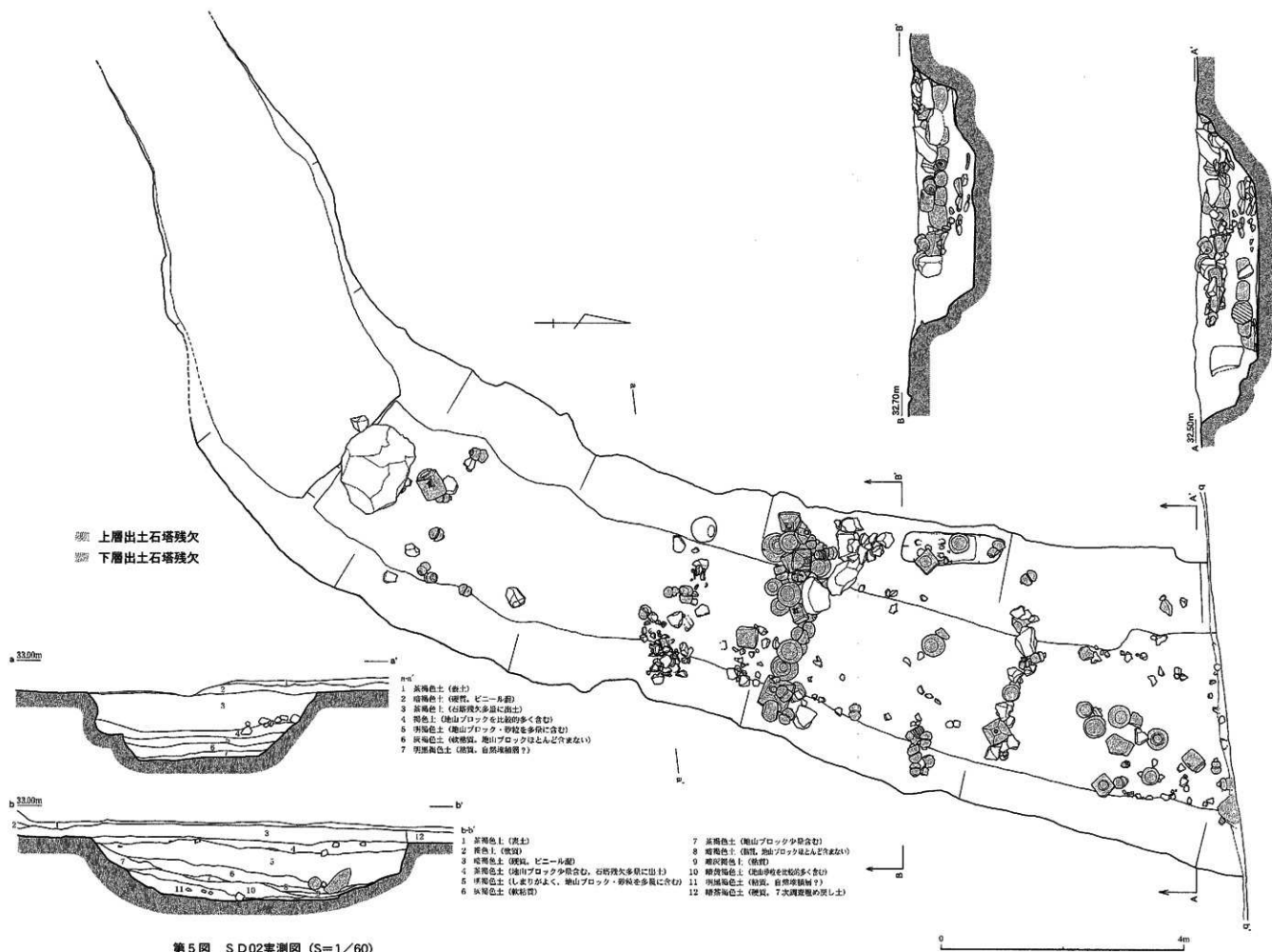
写真10 SD02土層断面 (南より)



写真11 SD04発露状況 (西より)



写真12 SD04土層断面 (東より)



第5図 S D02実測図 (S=1/60)

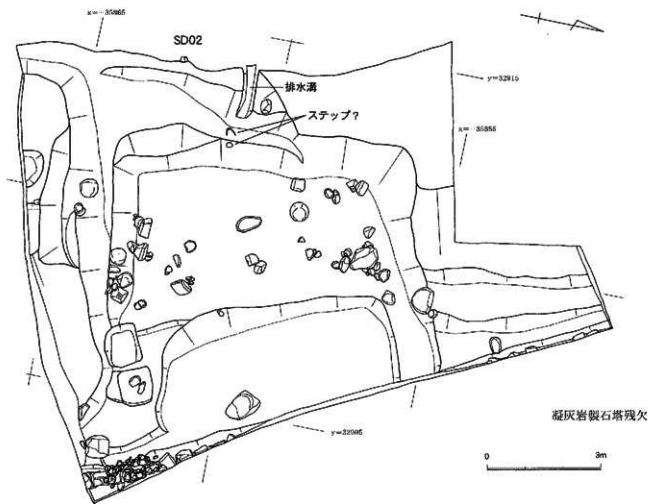
を多く含んだ土砂で覆われており、石塔投棄直後に人為的な堀の埋め戻しが行われた可能性が高い。  
 SD04 (第3図、写真11・12)

断面逆台形の小規模な箱堀である。SD02と同じく削平に伴い西側部分が消失しているが、位置関係から推測すれば、本来は千疊敷南側の箱堀につながると推定される。東側は城郭遺構とは無関係の近世以降の石垣で破壊されており、その部分より北側は外側の立ち上がりを確認できなかった。

規模は上幅1.2～3.3m、底幅0.9～2.3m、深さ約0.4mを測り、堀壁の傾斜角度は約 $50^{\circ}$ ～ $55^{\circ}$ で西側から東側に向かって緩やかに下傾している。また、数量は少ないが下層から五輪塔の残欠が出土している。

SD19 (第6図、写真13・14)

11次調査で確認された竪堀状遺構である。SD02が囲繞する平場を分断する位置にあるが、埋土の観察から遺構の新古関係が確認できないことや、排水溝を通じてSD02と連結していること



第6図 SD19実測図 (S = 1/100)



写真13 SD19空中写真（東より）



写真14 SD19石塔出土状況（東より）

から併存していたとみられる。上幅5.4～9.8m、底幅3.4～7.0m、平場面との最大比高差約3.6m、傾斜角度40°～55°で、等高線に直交するように掘削されており一見すると竪堀の形状を呈する。しかし、平坦面の存在や足掛けらしいステップが存在し、竪堀とは言い難い要素もある。

本遺構の下層からも石塔の残欠が検出された。そのほとんどが同一の層から出土しており、同時期に投棄された可能性が高い。

### 3 遺物

#### 土器・陶磁器（写真15～22）

中世の土師器や瓦質土器などの在産の土器類、青磁や染付などの輸入陶磁器のほか、古墳時代の土師器や近世以降の陶磁器などがある。出土遺物のうち9割以上を中世の土師器皿・坏で占め、それ以外は1割にも満たないことは、宇土城跡の機能や性格を考えるうえで重要であろう。

土師器皿・坏は、そのほとんどが糸切り底で指頭圧痕が残るものもある。瓦質土器は火鉢や摺鉢などがあり、使用痕跡が認められる。輸入陶磁器は青磁・白磁・染付の碗や皿が大半を占め、その他に赤絵碗や二彩や三彩の鉢、色釉を用いた置物などがある。染付は景德鎮窯産が大半を占めるが、福建省漳州窯産とみられる粗製の染付も出土している。これら輸入陶磁器の時期は13世紀～16世紀末までと比較的幅があるが、15世紀中頃～16世紀後半が中心である。

#### 石塔

五輪塔の風空輪・火輪・水輪・地輪や宝篋印塔の相輪・塔身、板碑の残欠が出土した。大半は五輪塔の残欠で9割以上を占める。石塔の形式から14世紀代のものが主体である。銘文を有するものはないが、一部の風空輪や水輪には梵字が刻印されているものもある。

#### 参考・引用文献

高木恭二・武本純一 2001『西岡台遺跡』『考古』新宇上市史基礎資料第9集、宇上市教育委員会



写真15 土師器



写真16 瓦質土器



写真17 青磁



写真18 白磁



写真19 染付



写真20 二彩



写真21 色釉置物



写真22 赤絵

#### 第4節 まとめ

本調査において最も注目すべき成果は、虎口周辺で城破りに用いられたと考えられる大量の石塔の残欠が出土したことであろう。これまでの調査でも点的に出土し、主郭南側のSD02も比較的集中して出土しているが、これほどまでまとまっているのは虎口周辺だけである。以下では大量の石塔が出土した空堀SD02を中心に宇土城跡で行われた城破りについて若干の検討を行い、現段階における認識をまとめてみたい。

出土した石塔は下層と上層に分けられ、石塔の投棄が2度行われたことが判明したが、出土遺物から上層と下層の時期を特定するには至らなかった。上層は出土量も下層に比べて多く、その一部は意図的に列状に並べられた様子がうかがえる<sup>1)</sup>。また、部位ごとの数量差が顕著であり、特に地輪がほとんど出土していないことは、何らかの目的で転用されたことを示唆するといえよう<sup>2)</sup>。

層序を大別すると、①最下層の自然堆積層→②下層の石塔を含む層→③地山の砂粒やブロックを多量に含む層→④上層の石塔を含む層の順で堆積しており、②～④は人為的な埋め戻し土とみられる。特に下層の石塔を覆い尽くす③は重要であり<sup>3)</sup>、④の段階になると虎口周辺の堀はほぼ完全に埋まったと推定される。1次調査前まで千畳敷を囲む堀が全く確認できないほどの平場だったことは、この堀の埋め戻しと密接に関連するのではないかと考えられる。

このように、宇土城跡における城破りの特色は、

1. 虎口という城において非常に重要な場所に対して意図的に大量の石塔を投棄する。
2. 石塔の投棄が2時期に分けられる。
3. 用いられた石塔の部位に偏りがあり、地輪はほとんど出土しない。
4. 下層の石塔は地山の砂粒・ブロックを多量に含む土砂で覆われている。
5. 石塔の投棄に伴って虎口周辺の堀の埋立てが行われている。虎口周辺以外の堀も埋立てられた可能性がある。

などがあげられる。石塔を用いた城破りは九州でこれまで確認例が無く、全国的にも篠本城跡（千葉県光町）、笹子城跡（同木更津市）、和良比掘込城跡（同四街道市）など数例に限られる。全て中世城郭であり、近世城郭では確認されておらず、中世から近世へと時代が移り変わる頃に行なわれなくなった城破りの一手法ではないかと推察される。

近世城郭の城破りは、石垣を壊したり曲輪への出入口を塞いだり壊すのが一般的である。熊本県内でも鷹ノ原城跡（玉名郡南関町）で石垣を意図的に崩す事例が確認されており（坂本2000）、佐敷城跡（葦北郡芦北町）でも角石を大規模に破壊した跡が確認されている<sup>4)</sup>。そのほか、鷹ノ原城跡では虎口の破壊も確認されている<sup>5)</sup>。城山でも本丸を巡る堀から大量の石垣が出土しており（木下1981）、幕命により「宇土之城を割給ふ」、「宇土之古城も石垣等取崩堀八埋め申候二付其形今八相見へ不」とする『肥後宇土軍記』の記述などから、城破りが行われたことは間違いないと思われる。



写真23 石塔（下層）を覆う土砂（7次調査北より）

宇土城跡の事例は中世城郭における城破りの性格や実態、ならびに近世城郭へと受け継がれる城破りの意味を探る上で極めて重要であるといえよう。

註

- 1) 類似事例として肥前名護屋城跡（佐賀県熱海町）の二ノ丸で意圖的に並べられた軒丸瓦・丸瓦が確認されている（高瀬2001）。
- 2) 宇土城跡（城山）では下層掘遺構（小西堀）の石壁や石列に地輪が数多く使用されており（木下1981）、宇土城跡（西岡台）の城破りとの関連で興味深い事例といえよう。
- 3) 人為的に城の構造物や対象物（石垣、瓦など）を地山の土砂などで覆い尽くす事例は、原城跡（長崎県南有馬町）、肥前名護屋城跡などで知られている。
- 4) 調査を担当した深川裕二氏（芦北町教育委員会）のご教示。
- 5) 調査を担当した坂本重義氏（南関町教育委員会）のご教示。

### 参考・引用文献

- 井上正枝灯 1977「肥後宇土軍記」『宇土城跡（西岡台）』—史料編—宇土市埋蔵文化財調査報告書第1集、宇土市教育委員会
- 木下洋介 1981『宇土城跡（城山）調査概報（1）宇土市埋蔵文化財調査報告書第4集、宇土市教育委員会
- 柴田龍司 1992「堀跡や曲輪から出土する石塔」『中世城郭研究』第6号、中世城郭研究会
- 坂本重義 2000『藤ノ原城跡』1南関町文化財調査報告書第5集、南関町教育委員会
- 柴田龍司 2001「篠本城・笹子城・和良比羅込城 石塔を堰に投棄する」『城破りの考古学』、吉川弘文館
- 高瀬哲郎 2001「肥前名護屋城 天下人秀吉の夢の跡」『城破りの考古学』、吉川弘文館





## 第Ⅱ章 保存整備工事

### 第1節 はじめに

宇土城跡の整備事業は、保存整備の基本方針をまとめた昭和56年度策定の『史跡宇土城跡環境整備計画』や、平成10年度策定の『史跡宇土城跡保存整備基本計画書』に基づいており、昭和56年度に着手して平成13年度までに21ヵ年が経過した。第1ブロック（西岡神社北側地区）はすでに整備を完了し、現在整備中の第2ブロック（千畳敷および周辺地区）は平成元年度より開始しているが、宇土城跡が位置する独立丘陵の基盤層は、旧期礫石安山岩であり、脆く崩壊しやすいため防災工事に数年を費やした。このため、遺構の整備を実際に着手したのは、空堀復元工を行った平成9年度からである。続く10年度も空堀跡の整備および11年度以降本格化する千畳敷遺構整備に伴う保護盛土などを行った。

以下で概要報告するのは、千畳敷の調査（4～7次）で検出された数多くの掘立柱建物跡のうち、整備対象となったIV-3B期の16・17・19号建物跡の整備工事についてである。16・17号建物跡は11年度、19号建物跡は12年度にそれぞれ実施した。事業の組織は次のとおり。

#### 11年度事業組織

事業主体	宇土市
主幹課	宇土市教育委員会文化振興課
設計・監理	柳空間文化開発機構
工事施工	柳ノカスボ熊本支店
工事検査	宇土市役所工事検査室
指導・助言	史跡宇土城跡保存整備検討委員会 文化庁文化財保護部記念物課 熊本県教育委員会文化課

#### 12年度事業組織

事業主体	宇土市
主幹課	宇土市教育委員会文化振興課
設計・監理	柳空間文化開発機構
工事施工	柳ノカスボ熊本支店
工事検査	宇土市役所工事検査室
指導・助言	史跡宇土城跡保存整備検討委員会 文化庁文化財保護部記念物課 熊本県教育委員会文化課



写真24 16・17・19号建物跡整備状況（南西より）

## 第2節 平成11年度保存整備工事

11年度は16号・17号建物跡、土手、暗渠排水、植栽、張芝などの整備を行った。

16号建物跡は2間×7間、17号建物跡は2間×4間の掘立柱建物跡で、いずれも建物の復元は行わず、柱を基底部より高さ40cm立ち上げるいわゆる平面表示を行った。柱位置確定にあたっては調査図面をもとに位置を確定し、10年度に実施した保護盛土(厚さ40cm)を掘削して建物を構成するピットを直接確認した後、再度保護盛土を施したうえで柱基礎を埋設した。柱は直径21cmの檜を用い、防腐材を注入した。舗装については建物部分が那智黒石を用いた洗い出し舗装、軒下部分(推定)は透水性真砂土舗装を行った。また、建物範囲を幅12cmの花崗岩切石、軒先範囲(推定)は自然石を用いて表示した。

その他の表示施設として、千畳敷南側から西側外縁部に転落防止を兼ねた土手表示を行った。規模は長さ99m・幅0.7m・高さ0.2mである。また、土手内側に沿って直径15cmの透水性管(網状管)を埋設した。

土手の天場部分にはコクチナシ・シャリンバイ・チャノキの植栽、千畳敷中央部から西半部にかけて張芝(ノシバ)の植え付けを実施した。



写真25 柱跡表示基礎据付(17号建物)



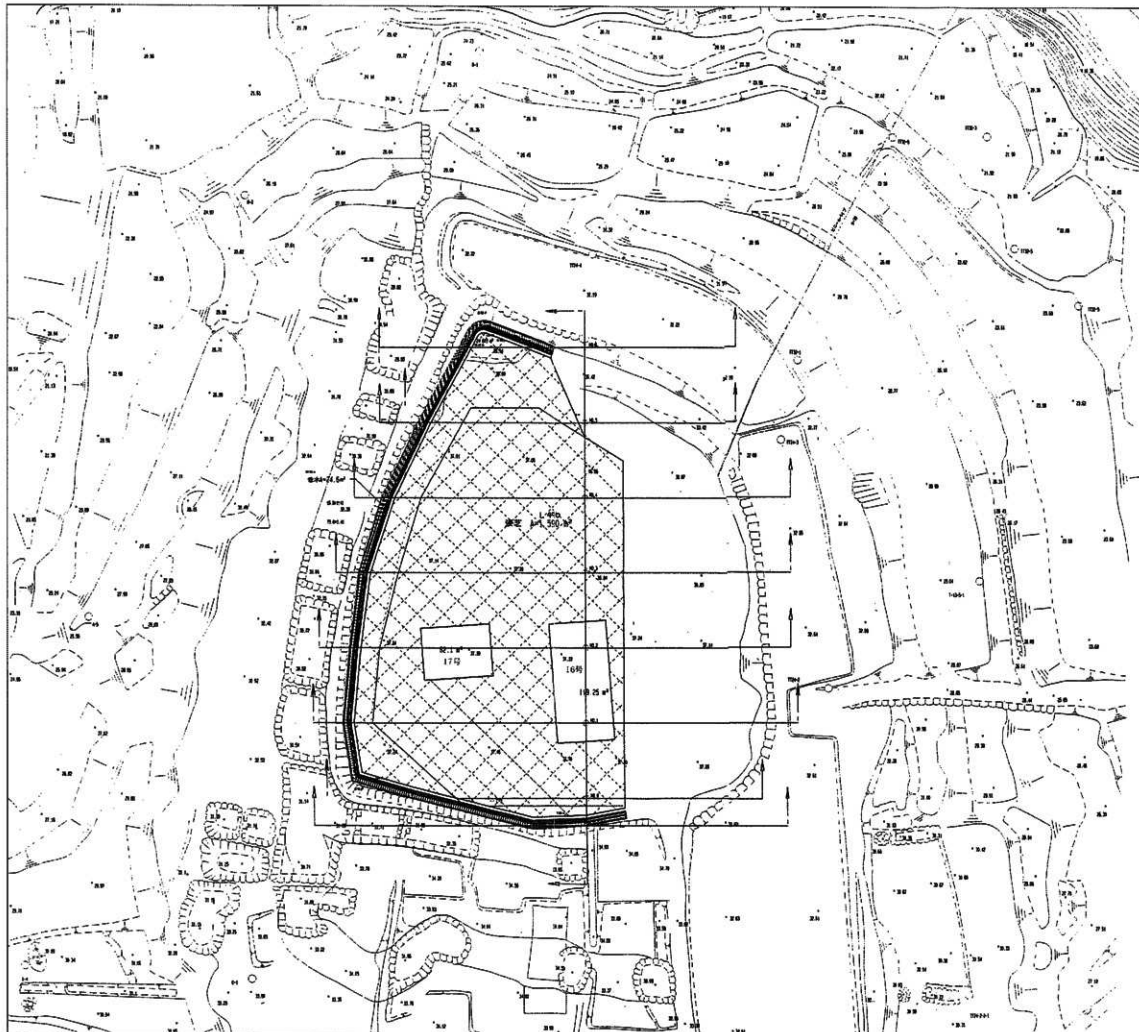
写真26 洗い出し舗装路盤完了状況(16号建物)



写真27 16号建物整備状況(南より)



写真28 17号建物整備状況(東より)



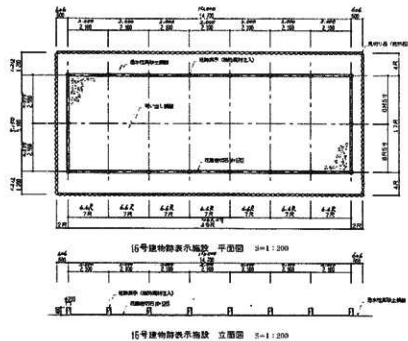
記号	名称	単位	数量	備考
10000	土留埋設距離	m		
10000	27.7x27.7 M2.3.3.3	個		
10000	埋設(1/2x1/2)	個		
10000	4x1/2 M2.3	個		
10000	埋設(1/2x1/2) M2.3.3.3	個		

第7図 造成平面図及び  
植栽平面図 (S=1/500)

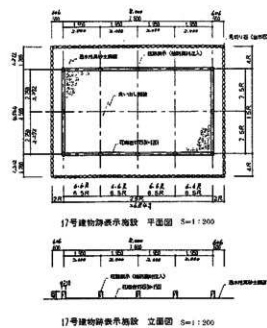
変更設計

事業名		事業	
工種名	平成11年度文部省土壌汚染対策事業		
図面名	造成平面図及び植栽平面図		
縮尺	1:500	図番	
年月日	平成 年 月 日		
設計	宇土市		

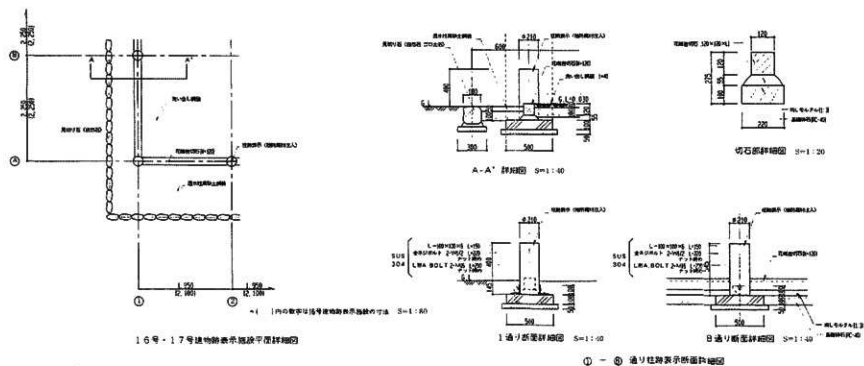
16号建物跡表示施設



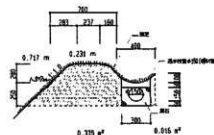
17号建物跡表示施設



柱跡表示詳細図



土手詳細図 S=1:40



變更設計

製表名	原簿
工務名	平成11年度茨城県土木試験所整備工事
図面名	詳細図
縮尺	図示
年月日	平成 年 月 日
設計	

第8図 各表示施設 (S=1/20・40・80・200)

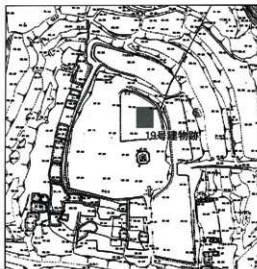
### 第3節 平成12年度保存整備工事

19号建物跡は千畳敷北東側に位置する3間×4間の掘立柱建物跡である。千畳敷の休憩施設を兼ねており東屋として立体的な整備を行った。建物面積は42.12㎡である。

基礎工事として、建物範囲の保護盛土を約55cm掘削し（柱部分は65cm）、柱基礎には厚さ5cmの砕石を投入した。その後、捨てコンクリート・基礎砕石を施し、コンクリート打設（布基礎）を行った。

木工事に関しては、柱（直径25cm）・梁・棟木は松、棟押え・地覆・桁・母屋・床板は檜を用いた。柱・梁・地覆・棟木・桁はチョウナ仕上げである。建物内部北半部には建物の活用上、床が必要と考えられたため高さ40cmの檜製床板を設置した。

その他、棟木下には雨漏り防止のため防水シートを貼り付け、床土間は三和土タキ仕上げ風、壁は土壁仕上げ風に施工した。軒下は那智石による洗い出し舗装、その外側に砂利敷を行った。



第9図 19号建物跡位置図 (S=1/2,000)



写真29 基礎コンクリート打設



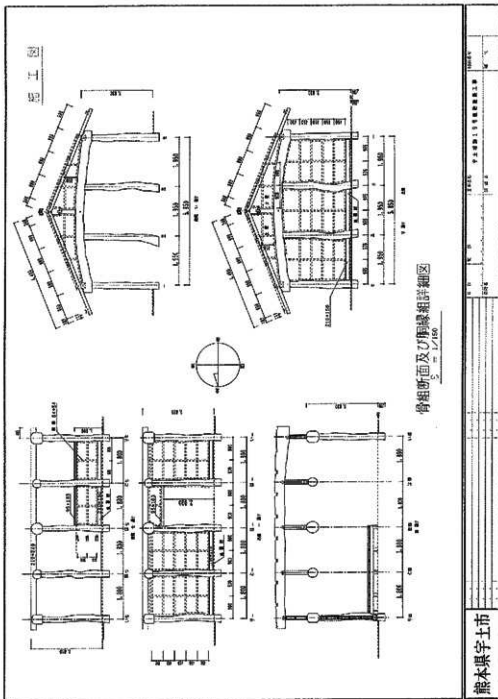
写真30 木造組建



写真31 外壁工事（下地塗り）



写真32 竣工（南より）



第10図 骨組断面及び脚縁組詳細図 (S=1/100)







## 報告書抄録

ふりがな	うとじょうあと(にしおかだい)							
書名	宇土城跡(西岡台)V							
副書名	発掘調査・保存整備事業概報							
シリーズ名	宇土市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ号	第23集							
編集者名	藤本貴仁							
編集機関	宇土市教育委員会							
所在地	〒869-0433 熊本県宇土市新小路町95							
発行年月日	2002年3月31日							
ふりがな	ふりがな	コード		北	東	調査	調査	調査
所収遺跡名	所在地	市町村 番号	遺跡 番号	緯	経	次数	面積	原因
うとじょうあと 宇土城跡	うとしん 宇土市神 めまち 馬町字千 じょうじ 壘敷	43211		32° 40' 34"	130° 38' 54"	14次	1080m <sup>2</sup>	史跡整備
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
うとじょうあと 宇土城跡	中世城	古墳 中世	溝跡(古 墳)・空堀 跡・竪堀 状遺構 (中世)	土師器・瓦 質土器・青磁・ 染付・白磁な どの土器・陶 磁器、石塔		全国的にも数少な い石塔を用いた城 破り		

宇土城跡（西岡台）Ⅴ

宇土市埋蔵文化財調査報告書 第23集

発行年月日 2002年3月31日

編集・発行 熊本県宇土市教育委員会

〒869-0433

熊本県宇土市新小路町95

印刷 コロニー印刷

